



Cable One

「ケーブルワン」の データ放送次世代サービス!!

「データ放送+スマホ」連携による 新たな地域貢献サービスに挑戦!!

佐賀県武雄市の(株)ケーブルワン(代表取締役社長・大野 裕志氏)では、過去5年間でのデータ放送の経験と利用者ニーズ、そして地域情報の蓄積を活かし、「データ放送次世代サービス」と称して第2ステージへ踏み出した。その第一弾がデータ放送とスマート端末(スマホ・タブレット)との連動による「地域情報アプリ」や、フェイスブックなどのSNS連携などで、コミチャン価値向上化に向けたデータ放送を基軸としたICTによる地域貢献サービスが注目されている。

**今までのデータ放送の経験を
今後に活かすサービスを模索**

ケーブルワンがデータ放送を開始したのは2010年4月、数多いデータ放送実施局の中でも早い時期からスタートしている。この間、行政からのお知らせや、災害情報など数多くのコンテンツを提供してきており、データ放送に関する経験は豊富で、多くの地域情報が蓄積され、地域団体との繋がりも深められた。その反面、利用者ニーズに対するデータ放送の限界や、スマート端末やSNS等の急速な普及、そして今後のコミチャン価値向上の布石を含めた課題も多く、2015年春のデータ放送設備更新を機に本格的な対応策を検討し始めた。

その中で重要項目として挙げたのが
① 共通アイコンによるスマート端末(スマホやタブレット)との連携
② 各端末の特性を活かした機能と、既存メディアとの融合
③ フェイスブックなど、データ放送とSNSとの連携

④ 情報収集の自動化による運用負荷の軽減

⑤ 将来的なMVNO事業やハイブリッドキャスト等への展開

これらの項目に対応するために既存設備ベンダーには拘らずベンダー選定を行った結果、ケーブルはもろろんのこと、NHKを始めとする地上テレビ局に於いても、データ放送やハイブリッドキャスト関連で多くの実績を持つメディアキャストを選定した。

**利用者ニーズに応え、
地域ポータルアプリを狙う**

今回のシステム検討のメンバーである営業開発部主任の柴田耕一郎氏は、「これまで、利用者や情報提供者(自治体や地域団体など)から様々な要望をいただきました。例えば写真(画像)を載せて欲しいとか、外出先でも利用出来ないか?といった要望ですが、帯域面や操作性への影響など、テレビによるデータ放送での限界を痛感していました。一方、スマホやタブレットなどのスマート端末が急速に普及しており、社内ではこの時代に手をこまねいていい



▲新システムの検討メンバーである営業開発部主任の柴田耕一郎氏。「コミチャンの総合力と放送と通信機能(ICT)を活かしたサービスを通じて新たな地域貢献を果たしたい」

のか?という意見も多く挙がっていました。そこで、今までデータ放送用に集めてきた地域情報という財産をベースに、これら端末の特性を活かす事で、今までのニーズに対応出来るのでは?と考えました。また、アイコンを共通化することで、地域ポータルアプリとして一気に普及させるケーブルの優位性と、将来のMVNO事業へ繋げる事も念頭におきました。」

**アイコンのオーバーレイ
表示機能に注目**

ケーブルワンの新データ放送は、メディアキャストの「DataCaster M3」をベースに2015年7月から開始した。これまで社内や情報提供者(自治体、小中学校、公民館、医師会など)の情報入力の手動で行ってきたが、「DataCaster M

3」は、ほぼ全ての情報をホームページ等から自動で取得出来る事から、運用負荷の大幅な軽減が実現している。

柴田氏は「作業負荷が軽減されたことで、掲載する情報量を増やすことができた。情報の更新も、スピーディーに対応できるなどの点が今回のリプレイスの最大のメリットです。」と言う。またオーバーレイ表示による高齢

者にも親しみやすいアイコン表示と、情報発信連動（新着情報）や時間連動（天気、警報・注意報）による自動表示、そして何よりもコミチャンを時計代わりに出来る時刻表示や、カラーボタン操作だけのお悔やみ情報へ一発遷移する機能も好評のようだ。



▲オーバーレイ機能を駆使したケーブルワンのコミチャントップ画面。コミチャンを選択すると自動的にアイコンが表示され、無操作の場合30秒で消える。



▲緊急情報やニュース、ケーブルワンからのお知らせ等のプッシュ通知画面。今後はクライアントからのプッシュ通知を受け入れるなど新規ビジネスの拡大（開発）が期待される。

▲スマホの地域情報アプリのトップ画面。12のアイコンと共に、ランチャー部分には4つのHPリンクアイコンで構成されている。情報が更新されるとアイコン上に「NEW」の表示が。

共通アイコンと端末特性を活かした機能

スマート端末（スマホやタブレット）への対応は、2015年12月にAndroid 5.0版、翌年2016年1月にiOS版のアプリをリリースした。iOS用のアプリではApple社の認定がハードルになる事が多いが、当アプリを開発したメディアキャストはiOS用アプリ開発の経験も豊富な事から、比較的容易にリリース出来たという。

現在のアプリは12のアイコン（緊急災害、防災カメラ、くらし、医療、ニュース、学校、武雄市（行政）、公民館、避難所、フェイスブック、ケーブルワン、PM2.5）で構成されており、避難所情報はグーグルマップで表示するなど、データ放送にはない、スマホやタブレットのデバイス特性を活かした「地域情報アプリ」となっている。

また、下部のランチャー部分には、同じくテレビやケーブルワンの「NEWS動画」（地域VOD）にもリンクされており、「海外や国内の出張先（県外に住んでいる人）からス

マホで武雄のことがわかるので非常に便利だという声を頂きます。現在、アプリの使用料は無料ですが、今後は有料化可能なコンテンツを育てたい。」（柴田氏）

プッシュ通知機能で、防災意識や視聴促進を強化

今後、強化したいサービスとして挙げられるのが、アプリの特性を最大限に活かした「プッシュ通知」サービスである。この機能は、利用者がアプリを起動していなくともスマート端末に情報を配信することができる機能で、「現在、火災情報や気象警報、防災行政無線情報等の更新を通知しています。行政、公民館、小中学校を、任意でのプッシュ通知が可能な権限者とし、データ放送と共用のCMSで、各担当者が、セレクトボックスにてプッシュ通知の選択が可能です。また、SNS連携によるニュース項目更新をお知らせすることで、加入者には視聴を促し、未加入者には加入を促す機能としても活用しています。また、平常時にはプレゼント告知などにも活用できることか

ら、販促や新たな広告媒体として期待しています。」（柴田氏）という。

コミチャンを起点とする事が今後のポイント

今回紹介したケーブルワンの「データ放送次世代サービス」は、コミチャンのデータ放送を起点とすることで、スマホやSNSとの連動を始め、将来のサービスである「ハイブリッドキャスト」にも対応できる事を念頭に置いており、テレビのHDMI入力切替えをする他のAndroidベースのスマートテレビサービスとは一線を画している。今まで培ってきた「地域情報」と「テレビ」をケーブルワンの軸足とし、各時代に適したスマート端末やSNSなどのメディアをうまく利用していく事が、今後のケーブルワンの重要なポイントであることは明らかだ。

MEDIACAST
Hybridcast ready

当社は、5/9（月）付で下記に事務所移転いたします。

株式会社メディアキャスト
<http://www.mcast.co.jp/>

- 新住所：〒141-0022
東京都品川区東五反田5-25-16
HF五反田ビルディング3階
- 新TEL：03-5449-6701

広告